

主の御心になつたダビデ王(2015年浦和)

2015年4月22日、浦和家庭集会
ゴットホルド・ベック

第2サムエル

12:13 ダビデはナタンに言った。「私は主に対して罪を犯した。」ナタンはダビデに言った。「主もまた、あなたの罪を見過ごして下さった。あなたは死なない。12:14 しかし、あなたはこのことによって、主の敵に大いに侮りの心を起こさせたので、あなたに生まれる子は必ず死ぬ。」

12:15 こうしてナタンは自分の家へ戻った。主は、ウリヤの妻がダビデに産んだ子を打たれたので、その子は病気になった。

12:16 ダビデはその子のために神に願い求め、断食をして、引きこもり、一晩中、地に伏していた。

12:17 彼の家の長老たちは彼のそばに立って、彼を地から起こそうとしたが、ダビデは起きようとせず、彼らといっしょに食事を取ろうとしなかった。

12:18 七日目に子どもは死んだが、ダビデの家来たちは、その子が死んだことをダビデに告げるのを恐れた。「王はあの子が生きている時、われわれが話しても、言うことを聞かなかった。どうしてあの子が死んだことを王に言えようか。王は何か悪い事をされるかもしれない。」と彼らが思ったからである。

12:19 しかしダビデは、家来たちがひそひそ話し合っているのを見て、子どもが死んだことを悟った。それでダビデは家来たちに言った。「子どもは死んだのか。」彼らは言った。「なくなりました。」

12:20 するとダビデは地から起き上がり、からだを洗って身に油を塗り、着物を着替えて、主の宮にはいり、礼拝をしてから、自分の家へ帰った。そして食事の用意をさせて、食事をとった。

今日は、ダビデと言う王様について、少しだけ、一緒に考えてみたいと思います。なぜならばこの、ダビデについて、彼は御心になう人であったと聖書は言っています。それだけではなく、彼は真の礼拝者とも呼ばれたのです。ダビデという人とは本当に、自分のことは別にどうでもよい、主が中心になれば、私は喜ぶ、そういう考えを持つものでした。

旧約聖書の中で彼はだいたい、中心になる人物と言えます。新約聖書の中心人物とはもちろん、イエス様を命がけで紹介したパウロだったのではないのでしょうか。パウロはイエス様によって、捕らえられて、主に仕える奴隷となり、そして、イエス様の愛に圧倒されたものとして、彼はイエス様を心から愛するようになり、御心になう人となったのです。そして、彼は心から、当時の主にある兄弟姉妹に、次のように書いたのです。我々にとっても、もっとも大切な箇所のひとつじゃないかな。

コロサイ

1:10 また、主になつた歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。

同じことが、ダビデについても言えるのです。ダビデも主のみ心になう人でした。私たちは集まりますと、ひとつの願いを持つべきです。すなわち、私たちは主の御許に行って、主との交わりあいを得ようという願いを持たなければなりません。けど、主ご自身も、そういう願い、交わりを求めておられると、聖書は言っています。主の御目は、あまねく全地を行き廻っている。全日本を行き廻っている。

また、我々の上を行き廻っており、分かれていない、分裂していない心、主に向かって一本になっている心の持ち主を探し求めておられます。私たちはもっと何か大きなことが起こり、私たちは何か上からの力によって喜ばされ、我々の集会を通して大きな業がなされることを期待しているかもしれないけど、主は、我々の分かれていない単純な心、主に向かって単一な心を求めておられます。確かに人間は表面的な事柄、生まれつきの賜物や能力を見がちなもの。けども、主はそうではない。心を見ていてくださるのです。

当時の預言者であるサムエルという男がダビデの家庭に行つて、王様を選ぶに当たり、10人の兄弟のうち、一番上の兄を見て思ったでしょう。すなわち、この人は実に立派な容貌、容姿を持っている。この人こそ王となるべきだと思ったに違いない。けども、主はサムエルの心に反し、その兄を選ぶことをしなかったんです。主は、人の思いに反し、もっと小さな弟、すなわち、子羊のようなダビデを選んだのです。

人間だったらそういうことを絶対にしない。どうして、ダビデが選ばれたかといいますと、なぜならば、彼は分裂していない心を持っていたからです。我々もダビデのような心の持ち主であれば、本当に幸いです。

聖書の中心に書かれている詩篇はだいたい、ダビデの書いたものです。その中のもっとも有名なひとつは詩篇の23編なのではないでしょうか。ダビデは心から賛美することができたのです。主は私のものです。主は私の羊飼いです。私そのものは、何もできない、どうしようもない羊に過ぎません。けど問題は、羊飼いの近くにいれば必ず守られ、導かれるのです。ダビデは、『主はわが牧者なり、主は私の羊飼いである』と、心から言うことができたのです。

この言葉を逆に申しますと、私そのものは、愚かな弱いどうしようもない子羊に過ぎない、ということになります。羊という動物は、外敵から自分で守ることができない動物です。ダビデは羊飼いだから、羊のことをよく知っていたんです。けども、彼は、私はあたかも愚かな弱い子羊のようなものです。だから、『私には、私を終日(ひねも

す)、教え導き、守ってくれる羊飼いがどうしても必要だ』と言っています。私は弱い子羊だから偉大なる牧者、主が必要だと、ダビデは、ダビデの心は謙虚で、柔和でした。私たちはどうでしょう。『私たちは、小さな弱い子羊です。私たちを終日(ひねもす)、教え導き、守ってくださる羊飼いが必要です』という状態でしょうか。ダビデは、もちろん決して完全ではなかったのです。彼も自分の弱さを感じ、完全に絶望してしまつたことがありました。

第1サムエル

27:1 ダビデは心の中で言った。「私はいつか、いまに、サウルの手によって滅ぼされるだろう。ペリシテ人の地にのがれるよりほかに道はない。そうすれば、サウルは、私をイスラエルの領土内で、くまなく捜すのをあきらめるであろう。こうして私は彼の手からのがれよう。」

彼はこう言ったのです。このダビデは、主からすばらしい経験を与えられた後、このように祈つたんです。自分勝手なことばを口にしました。それだけではなく、それを行ってしまったのです。これ以前、かつて、主はダビデを呼び、ダビデにやがて王となることを約束なさいました。けれどもダビデは、何と言うでしょうか。『主は、今はもはや成すことができない。もうすでに遅すぎる。私だって、王となることはまったく望みがない』と、彼は思いこんでしまったのです。

彼は、それまでの長い間、主はご自分のご計画を必ず、余さず、成就されるということを確認し続けましたけど、今はどうでしょう。周りの情勢が困難に見えます。絶望的に見えます。ダビデはすべてがダメであると、望みを捨ててしまったんです。実際にはこの時、ダビデの敵であるサウルという王様の死は、間近かにせまり、ダビデが王となるのは目前に近づいていたんです。やがてダビデは王となるのですが、ちょうどその寸前、今の時は、悪魔が働き、闇の時であり、絶望に引き込まうとする時期でした。

ひと言葉で言いますと、ダビデは、『もうダメ、』絶望してしまいました。けど、ダビデの歌った歌である詩篇を読んでまいりますと、このダビデは、最も深いどん底の苦しみにあつても、また、非常な絶望に陥っていた時も、逃れ路が見えないで前途が真っ暗な時も、ひたすらにダビデは主を礼拝した。『私はいくら弱くても、あたかも一匹の愚かな弱い子羊であっても、主は私の羊飼いです。だから、心配する必要はない』と、ダビデは告白するようになりました。すなわち、『私は、確かに弱い守りのない者です。悩む者です。貧しい者です。』だからダビデは、主を必要であり、主を選んだのです。けど、だからこそ逆に主は、ダビデを選んだのではないのでしょうか。

我々にそのような心を持っているのでしょうか。もしそうなら、主がダビデを選び、油を注がれたように、私たちも選び、祝福して、用いるようになるでしょう。油とは、旧

約聖書においていつも、神の御霊を象徴し、御霊に満たされることこそが、もっとも大切であり、実を結ぶことの秘訣そのものです。ダビデは、へりくだって柔和な心の持ち主でしたから、主に選ばれ、絶えざる喜びに満たされたのです。

ある人は、『主よ、お願い。私を聖霊に満たしてください。私を祝福してください』と祈り、断食し、夜通し祈ろうとしますが、その結果はどうでしょう。何も起こりません。それは、その人の心の状態がいけないからです。けど、主は、砕かれた謙遜な柔和な心の持ち主を求めておられます。我々の心とはどういうものでしょうか。私たちは謙遜な柔和な心を持っているのでしょうか。今日は暇がないけど、家に帰ってから、詩篇 51 篇をお読みになってください。この 51 篇を見ると、心を全うした人は、決して完全な人ではなく、罪を犯さない人でもないことが解かります。

けどダビデは、へりくだった心を持っていたのです。また、ダビデは、悔い改める備えのできた心を、常に持っていました。ダビデの前の王である、ダビデを攻めたサウルという王様は、罪を犯した時に、その罪を隠そうと努力し、その罪があらわにされた時も、それを全部、言い表すことをいたしませんでした。彼は傲慢であり、心高ぶっていたからです。ダビデの心は、それに反し、常に悔い改める備えのできた心を持っていました。

主がダビデに、『お前は罪を犯した。お前はその人である』と言った時、ダビデはそれに対して、直ちに答えたのです。『はい、私は罪を犯しました。私がおの男です』と答えました。我々は、サウルのような者でしょうか。あるいは、ダビデのような者なのでしょうか。箴言 28 篇 13 節、みなさん、暗記していることばでしょう。非常に大切な御言葉です。

箴言

28:13 自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。

隠したら、遅かれ早かれ後悔します。意味のないことです。主の前に隠すことができないからです。結局、私たちは、誇り高ぶり、己に満足しているのでしょうか。それとも、『主よ、あわれんでください、私の自己中心的なところを赦してください』と、心から祈るのでしょか。ダビデは、柔和にして謙遜な心の持ち主でした。ダビデは告白したのです。私の杯はあふれています。意味は、私の喜びは満たされている。ダビデの祈りは次のようなものでした。『私は、あなたを必要とします。どうか私を導いてください。私は弱い、どうしようもない者ですから』と言っているような心を持っていないならば、確かにすべてが無駄であると言わなければならない。

ダビデとはどういう男だったか。今、話したように、第一番目、へりくだった心を持っていた人でした。2 番目、悔

い改める備えのできた心を持っていたのです。もうひとつ、3番目、彼は清い心のために祈りました。詩篇 51 篇の 10 節、彼の祈りが書かれています。

詩篇

51:10 神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。

正しい心の状態を保ちたいと願う心が、ダビデの心でした。

詩篇

51:17 神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。

ダビデは、砕かれた心を持って、己の罪を告白しましたが、我々はどうでしょうか。悔い、砕かれた魂を主は喜んでくださいます。いつも覚えるべきことは、私たちの願いや、私たちの平安や、私たちの満足が問題ではない。私たちが主の御心の真ん中を歩んでいるかどうかが問題です。ダビデは、主の御心になつた男でした。ですから、ダビデは用いられるようになり、喜びに満たされたのです。

詩篇

51:11 私をあなたの御前から、投げ捨てず、あなたの聖霊を、私から取り去らないでください。

彼は真心から祈ったのです。罪を犯すことによって、主の臨在はダビデを去ってしまったのです。罪を犯す前のダビデは、親しく主の御声を聞き、あざやかに主の導きを知り得たのに、今はもう、すべてがダメになってしまったんです。

詩篇

51:12 あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。

この節によると、主の親しい臨在を失っただけではなくて、同時に、もう一つの大切なものを失ったことがわかる。それは何かと言いますと、救いの喜びでした。どうでしょうか。私たちは皆、主のあふれ、流れいずる喜びにあずかっているものなのではないでしょうか。主御自身の喜びは、我々のものとなっているのでしょうか。私には、主の喜びが必要だ。これはダビデの心の状態でした。私たちも共に、主の溢れいずる喜びにあずかっていたいものなのではないでしょうか。

ダビデは自分の心の状態だけを気にして、主に祈り、求めました。主の御心になつたダビデ王は、自分の賜物、説教、歌について何も語っていない。それは彼が、もし心の状態が悪いなら、それらのものは何の役にも立たないことをよく知っていたからです。また、ダビデは知っていました。すなわち、もし自分と主との親しい関係になる

ならば、罪人の間に何か起こるということを知っていたのですね。

詩篇

51:13 私は、そむく者たちに、あなたの道を教えましょう。そうすれば、罪人は、あなたのもとに帰りましょう。

もし、私たちが柔和にして、心低い者でないなら、罪人に罪を指摘することはできません。ですから、大切なのは我々が立派になることではない、主をよりよく知ることであり、そして、主との交わりの大切さをよりよく、体験的に知ることです。

ダビデは、主の救いにあずかり、主にあつて大いに喜ぶことのできた男でした。そして、その信仰生活の初めの半分を、主の導きのままに過ごされたのです。けど、彼の生活にも破綻がやってきた。姦淫の罪を犯し、同時に殺人の罪まで犯してしまったのです。もし私たちが、自らの心をよく知っていなければ、あんなにすばらしい信者でさえ、あのような罪を犯すのだろうか、疑問に思うことでしょう。これに対して主は、『ダビデはもう望みが無い、諦めて捨てちゃいましょう』と、言われたのでしょうか。決してそうではありません。51 篇の 3 節と 12 節を見ると分かります。

詩篇

51:3 まことに、私は自分のそむきの罪を知っています。私の罪は、いつも私の目の前にあります。

51:12 あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。

これはダビデ王の心の底からの叫びでした。後に、主の大いなる恵みと愛によって、ダビデは変えられるようになりました。詩篇を読むと解かります。主ご自身の判断はどういうことになったのでしょうか。『わたしは、エッサイの子ダビデを見つけた。彼は、わたしの心になつた人だ』と。人を讃えるのに、これよりもすばらしいことばがあるのでしょうか。

前に申しましたように、ダビデは心から主を礼拝する、礼拝者になったのです。けど、礼拝とは何でしょうかね。すなわち、すべてのことを主の御心のままに、お委ねすることです。主の道に己を委ねることです。私たちは、しばしば祈るでしょう。『主よ、御心をこのように変えてください。主よ、この重荷を私から取り去ってください。主よ、この環境を変えてください』と祈り、叫び、求めます。祈りはこういうものです。すなわち、祈りは、我々の願いの言いあらわしですけど、礼拝、崇拝とは違う。礼拝とは、己のすべてを、何もかも主にお委ねすることです。

もちろん、主の道はいつも我々の願いとは同じとは限りません。前に読みましたサムエル下の 12 章を見ると分かります。主の御心になつたダビデ王に、主は言わざ

るを得なかった。『あなたに生まれる子供は必ず死ぬ』という恐るべきことばが臨みました。ダビデは、自分の子供を愛しました。主に請い求めました。断食しました。地に伏して、ひたすらに祈り求めたのですが、その子は死んだと聖書は言っています。多くの人は、かかる立場に置かれる時、『なぜでしょう、どうしてでしょう』と言うでしょう。ダビデは違う態度を取りました。着物を替えて、主の家に入って、拝したとあります。礼拝した。

礼拝は、主の道に全く心からなる賛意を表することです。己がすべてを主の御心に委ねることです。万軍の主はいつも、一生懸命、探しているでしょう。なぜなら、主は奇跡を行なう力を現したいから。けども、主に向かって心を全うしている人がなければ、高く引き上げられた主は、ご自分の全能を現すことができません。

私たちは、主の力を妨げることを全部、捨てようと思わないでしょうか。私たちは見えるもの、感じるものによりますか。あるいは、信仰によって前進するのでしょうか。主は、霊的に死んでしまった者を、今日も生き返らせることができます。これを固く信じるのでしょうか。それとも不信仰、不従順によって、主の力を妨げるのでしょうか。ダビデとは、どうして御心になう人と呼ばれたのでしょうか。

詩篇

18:1 彼はこう言った。主、わが力。私は、あなたを慕います。

18:2 主はわが巖、わがとりで、わが救い主、身を避けるわが岩、わが神。わが盾、わが救いの角、わがやぐら。

このような態度をとるものは、必ずダビデのように喜ぶことができ、用いられるようになるに違いない。

おわり